パネル討論
究極のごみゼロ社会を目指して

パネリスト（発言順）
松岡夏子（NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー事務局長）
長澤俊一（平塚市環境部長）
梶山富子（平塚市ごみ減量化婦人の会会長）
斎藤啓司（株式会社リコー厚木事業所総務副室長）
木谷正道（NPO法人平塚・暮らしと耐震協議会副理事長/元新宿西清掃事務所長）
笠松和市（徳島県上勝町長）
松岡紀雄（司会/神奈川大学経営学部教授）

司会　皆さん、上勝町長の基調講演をどのようにお聞きになられたでしょうか。これを受ける形でパネル討論を進めたいと思います。笠松町長のお話は、ひと言で言えば、今まで、そして今も私たちの多くが当たり前と考えている、欲しいものを欲しいだけ手に入れ、使い、要らなくなればポイと捨て、それを行政の手で税金を使って燃やし、埋める。こういうやり方が、21世紀、さらには22世紀に続けていけるわけがないだろう。そういうなかで、多くの自治体は、立派な焼却場を建てようとか、埋め立て地をどこにしようなどと考えているが、上勝町ではもう一度原点に返って、「ごみゼロ」という大きな目標を掲げて取り組んでいる。笠松町長のそうした取り組みの下で実際に活動しているのは、松岡夏子さんという、大学を出てまだ数年という若い方です。笠松町長の基本的なお考え、特に2020年までにごみゼロという明確な目標を掲げておられるが、実際にどのように取り組んでおられるのか、またどういうご苦労をなさってお

られるのか、お聞かせいただきたいと思います。

1　拠点回収で34種類のごみ区分を実現

松岡　私は上勝町に生まれ育った者ではなく、兵庫県西宮市の出身です。ごみのことなどまったく関心がなく、ごみはごみ箱に入れたらどこかに消えていくんだろうくらいにしか考えていませんでした。ごみ問題を意識したきっかけは、19歳の時に香川県の豊島（てしま）という、産業廃棄物の不法投棄で有名になった瀬戸内海の島を訪れたときのことです。ここで、ごみというのは消えてなくならないんだ、捨てたごみは日本やアジアのどこかに存在しているんだ、ごみ問題は他人任せにしてはいけないんだということを感じました。その後豊島以外にも、産業廃棄物の不法投棄で困っているところをあちこち訪ねていって、同じようなところが日本中たくさんあると痛感しました。ごみが埋まっていない山を見つけるほうが難しいと思うほどでした。

そういう経験をして、ふと自分の生活を振り返ると、ふだん食べている食品は近所のスーパーマーケットで買っています。それらの食品は、日本各地で作られていますが、そうした場所の近くに不法投棄があってもちっともおかしくないということに気づき、恐ろしくなりました。最初は、捨てたごみがどこに行っているかわからないから怖いなくらいの気持ちだったのが、それが回り回ってブーメランのように自分のところに返ってきている、それが世の中なんだなと気づいたのです。安全な物を食べたいと思うかぎり、捨てるごみにも気を使っていかなければならないと感じて、そういうことを周りのいろんな人に知ってもらわないといけないと考えるようになったのです。

そうした折に、上勝町の笠松町長を知ったのです。住民はわずか２千人しかいないのですが、ごみを34種類にも分けて、何と80％も再資源化しています。それに、ごみを34種類にも分別すると、日頃自分がどういう物を使って生きているかもわかってきます。日本にもこういう町があったのかということを知って、ぜひともこうした取り組みやゼロ・ウェイストという考え方を日本中に拡げていきたいと思って、活動するようになりました。

日頃の活動の拠点は、上勝町に唯一のごみステーションです。上勝町では、

ごみ収集車がいっさい走っていません。山間の町ということもあって、町民はみんな自分の車でごみをここに持ってきます。全部で40くらいの回収箱が並んでいて、そこにごみを入れていきます。ペットボトルの蓋はここ、割り箸はここ、といったふうに。そういう方法だから、34種類もの分別が可能です。

上勝町では、小さな町ということでこういう方法をとっていますが、大きな町の場合を考えると、今までは出たごみは燃やすというのが当たり前だったんですね。だから、一括して大きなパッカー車で町中から回収しています。しかし、これからは、もっとごみを「再資源化」するための回収ということを考えていかないといけないと、この現場にいて思うんです。

こういった拠点回収という方式をやれるところでは、かなりのレベルまで資源回収が可能になります。しかも、ここが一つのコミュニティの場所として発展していく可能性もあるんですね。小さな町で、場所もあるからできるんだという面もありますが、視点を変えれば、大きな町でもこうした考え方を生かせる面もあるのではないでしょうか。そんな思いから、全国各地を回って上勝町の取り組みを紹介しています。

きょうの会場には東京都の町田市の方も見えています。町田市のような大きな町でも上勝町のような拠点回収ができないかと、実験をされたと聞いています。大きな町でも、できる部分でこうした拠点回収をされてはというのが、私の提案です。

スライドは「くるくるショップ」です。同じごみステーションの、別の部屋にあります。これは、リサイクルではなく、リユース（再使用）を進めるための部屋です。ごみを捨てに来たついでに、「これはまだ使える」という物を、町民の方が自分でここに並べます。それを、ごみを捨てに来た別の人が、「わたし、これ欲しかった」と、無料で持ち帰って活用できる仕組みです。その名のとおり、不要品を町民がくるくると回して使っていくということですね。コ

ミュニティの中に、こうした物の循環のためのステーション（拠点）が設けられたおかげで、リユースされる物の割合も増えました。

ごみステーションというのが、みんなが近寄りたくないような嫌な場所ではなく、逆に楽しい、何度も行ってみたい、コミュニティの拠点になる可能性もあるのではないかと思います。ごみも減らして、住んでいる人も楽しくなる、そういう可能性もあるのではないかと思います。

「ゼロ・ウェイスト」という言葉ですが、これは焼却や埋め立てをするごみを無くしていこうとう考え方です。上勝町で実際にそうした取り組みをしていて痛感することは、こうした取り組みからいろいろな広がりがあるなということです。おばあちゃんは、くるくる工房（写真右）で使えなくなった鯉のぼりや着物のリメイクをしています。エプロンを作ったり、浴衣を作ったり、ふんどしを作ったりして販売して楽しんでいます。それまでは病院にばかり行っていたおばあちゃんが、今ではこうした活動が楽しくてたまらない。病院に行くのに乗っていたバスを、今では途中下車して、ここでエプロンなどのリメイクの作業をしています。

おばあちゃんの笑顔を見て思うことは、ごみをただ漫然と燃やし捨てていたら、このおばあちゃんがこうしたリメイクに取り組む機会はなかったんだな、ということです。ということは、不要になった物を燃やすというこれまでの常識は、物だけではなく、おばあちゃんたちが関わることのできる場所も一緒に燃やしていたんだなと痛感しました。ごみゼロを進めようと考えたおかげで、こうして人が関わることのできる場所、人が生き生きと活動できる場所が増えたわけで、これもゼロ・ウェイストの副次的な効果かと思います。

日本は資源のない国だと言いますが、単に捨てているだけで、ほんとうはたくさんあるのではないでしょうか。ごみをゼロにしようという取り組みから、物も生き返り、人も生き返ります。そうした取り組みもあっていいのではない

かと思いながら、毎日の活動をしています。

司会　ごみステーションが、汚い場所、近寄りたくない場所ではなく、逆に地域住民の生活の拠点、さらには生きがいの場所になっているというお話、非常に印象的です。

ひとつ気にかかるのは、みんなが自分でごみを持って行くということですが、高齢者や、あるいは車の運転のできない方、そういう方々にはどういう配慮をしているのでしょう。

松岡　自分でごみを持って行けない方が100世帯くらいあります。そういう方々については、町にシルバー人材センターというのがあります。高齢の方で、何かできるという方が登録しているんです。そちらの方々が、２ヵ月に１回そうした家を回ってごみを集めることをしています。生ごみについてはみんな自宅で堆肥化していますので、それ以外のごみについては腐りませんから、２ヵ月に１回で十分かなと思っています。

２　ごみではなく「資源再生物」

司会　ことし平塚市の環境部長に就任された長澤さんから、ごみ問題に関する平塚市の考え方、取り組みについてお話しいただきます。

長澤　最初に残念なご報告をしなければなりません。去る11月23日、平塚市のリサイクルプラザで火災がありました。燃えたのは、プラスチック容器包装材と呼ばれるものです。そのピットのなかでプラスチックの一部が燃えました。原因ですが、事件性はないだろうというのが警察の見解です。消防署でも原因は特定できないだろうということですが、いちばん可能性が高いのは、プラスチックの中に、入れてはならない異物、ライターのような可燃性の物が入っていて、それが何らかの事情で発火したしたというのが、いちばん可能性が高いようです。早急に復旧したいと考えていますが、ただプラスチック容器包装材のラインが完全につぶれていますので、その復旧には相当の時間がかかると見ています。

今後とも可能な限りごみの資源化を図っていきたいと思いますので、ごみの分別収集については、従来通り行っていただきたい。分別排出については、市

が配布したチラシなどに記載されたルールを守っていただきたいと思います。ご協力をお願いします。先ほどの事情から、一部処理しきれない場合もあろうかと思いますが、その場合には燃やすことも視野に入れています。

本日のテーマであるごみゼロ、ゼロ・ウェイストということですが、平塚市は相当古くからごみの資源化に取り組んできました。当時は、ごみ資源化の先進都市と言われていたほどです。

わたしの子どもの頃にも、ビンとかカンとか、鉄くずとか集めて廃品回収というのがあって、それを業者に売っていました。集団回収と名称が変わって続いていましたが、それには行政はタッチしていませんでした。昭和52年にある係長が、他市の事例に倣って提案して、市が８円でごみを買いましょうということで始めたのが「平塚方式」と呼ばれるものです。自治会ではなく、PTAや老人会、子供会とかいろんな団体が、売却できる物を集めて業者に売るという方式です。この方式では、値段が下がったときには集まりにくい。そこで、平塚市が常に８円で買いましょう、そうすることによってごみを減らし、資源化していきましょうということにしたのです。この平塚方式によって３万トン以上が資源化されました。

この集団回収も中心になってやる方がたいへんだということで、昭和61年に、いまの定時定点によるステーション方式に制度を変えました。８円で買い上げるというのは継続し、支払先は自治会にしました。これが「新平塚方式」と呼ばれるもので、現在に至っています。そういうことで、ごみ減量化については平塚市も相当努力してきたことは認めていただきたいと思います。

集まった資源ごみがどうなっているのかという問題があります。中枢的な役割を担っているのは、今回火災のあったリサイクルプラザ（写真右）です。愛称がクルリンです。上勝町ではくるくる工房と呼んでいるそうですが、平塚市のリサイクルプラザのパンフレットにイラストが描かれている動物の犀、この名前が「くるくる」なんです。一般公募によって付けられた愛称です。いまのリサイ

クルプラザの名前も一般公募で決まりました。

リサイクルプラザでどういうごみを処理しているかということですが、そもそもごみという呼び方がおかしいですね。平塚市では、資源ごみという呼び方を変えて「資源再生物」としました。ごみと呼べば、やはり勘違いをされてしまう。それで資源再生物と呼ぶことにしたのです。

資源再生物のうち、このリサイクルプラザで処理できるものは、スチール缶、アルミ缶で、約６トンです。ビン類が12.8トン、ペットボトルが3.5トンです。その他、プラスチック容器包装材というのがありますが、平塚市では略してプラクルと呼んでいます。これが22.3トンです。22.3トンを貯めるのに要する容積は1,100m^{3}くらい必要です。これを３日間貯めるためには3,000m^{3}も必要ということになりますので、われわれは鉄の箱を用意して入れるという方式を考えました。

ビン類については、容器包装リサイクル法という法律に基づいて、指定法人と呼ばれるところ（財団法人日本容器包装リサイクル協会）に引き渡しています。ビンの種類を５色、色別に分けて流します。その他に、ビール瓶や一升瓶といったリターナブル瓶というのがあります。これらは別に分けて売却しています。５色に分けるのは、カレット瓶と呼ばれるものです。これは割って、再び瓶の素材にされます。

缶については、平塚市はスチールとアルミの混合回収です。皆さんには、スチールとアルミを分けて出していただく必要はありません。機械選別を行います。分けて出されると、いわゆるアパッチに持っていかれやすくなります。スチール缶は何になるかというと、建設用の鉄筋などです。アルミ缶はまたアルミ缶になりますが、スチール缶がまたスチール缶になることはありません。転炉と高炉という、溶鉱炉の違いによるものです。

ペットボトルについては、平成17年度まで指定法人ルートで流していました。指定法人のルートに流すと、実際にどの業者が落札して、どういうふうに資源化されるか、われわれが要望することができません。指定法人である財団法人日本容器包装リサイクル協会が握っています。シャツになったり、毛布になったりし、いろいろなマテリアルになります。ペットボトルから化学的にいったんペットボトルの素材にして、またペットボトルを作るという業者も神奈川県

内にいます。B to B、ボトルからボトルへということで、これなら究極のリサイクルです。繊維にした場合は、現在の技術では一度きりですから、リサイクルではなく、サイクルということになります。

その他プラクルと呼んでいるプラスチック容器包装材については、指定法人に流していますが、平成19年度には、昭和電工という会社の手で、プラクルからアンモニアが作られています。

おもちゃなどをプラクルと一緒に出してはいけないのかとよく訊かれますが、プラクルには必ず「プラ」という四角のマークが付いています。このマークの付いたものだけ出してくださいとお願いしているのは、それらについては再資源化の費用を製造業者が負担することになっているからです。そのマークがないと費用を負担するものがいないということで、再資源化ができないのです。

司会　ありがとうございます。リサイクルの仕組みについても、詳しくお話しいただきました。この会場には、平塚ごみ減量婦人の会のメンバーも大勢いらっしゃいますが、梶山さんはその会長というお立場です。皆さんの取り組みについてお話しいただきたいと思います。

3　水切りで生ごみ30%を削減

梶山　昭和63年に平塚市の施策によって、平塚市ごみ減量婦人の会が発足しました。1年目は勉強ということで、2年目からごみ減量、資源化を目指して16項目の提言を行いました。それらの提言に沿って活動を続けています。牛乳パックの資源化から始まって、廃食油、ペットボトル、プラクルの資源化を実行しています。

リサイクルペーパーから出来たトイレットペーパーを平塚ロールと呼んでいますが、平成7年からこの販売推進を行っています。市内の公民館まつり等で、会員が販売しています。1回使うとまたというご希望が多く、繁盛しています。これは、どんどん使っていただかなければリサイクルになりません。大きな輪になるように、ご協力をお願いしたいと思います。

わたしたちの活動のなかで、水切りが大きなテーマです。生ごみの50%が水だということを受け、平成17年、水切りの実態調査を行いました。その結果、

絞ることで12%減、重石で押すということで13%減、干して出すということで30%減という結果が出ました。ごみの減量には水切りが欠かせません。これは、市民の皆さんにぜひ徹底していただきたいことです。

ごみ減量化の活動を知っていただこうということで、平成５年より湘南ひらつか七夕まつりのパレードに参加して大いにPRをしています。会員30名ほどで毎年参加し、現在も続いています。

マイバッグの推進は、ごみの減量にはなくてはならないものです。今年度、平塚市商店街連合会と平塚商工会議所の提言の下、わたしたちもその一員として参加しています。升水一義実行委員長や飯尾紀彦事務局長のご指導によって、平塚独自の湘南ベルマーレのイメージカラーを施したマイバッグ、「湘南ひらつかマイバッグ」を制作しました。500円で販売していますので、ぜひお買い求めいただき、少しでもごみの減量に役立てていただきたいと思います。

ごみ減量婦人の会は、市内の各地区のニーズにあった活動をしています。正しいごみの出し方をしなければ、ごみの減量にはつながりません。ごみを出せばいいというのではなく、資源物として、いい資源物を出していただきたい。と言うことは、中身を使い切って、洗って、乾かして、出していただきたい。市から配られるチラシに詳しく書かれていますので、それに従って進めてください。

誰にでも出来るごみのダイエット、それは水切りの徹底です。それが、ごみ処理経費の節減にもつながってきます。税金の無駄遣いのないように、皆さんのご協力、よろしくお願いします。

それから、いちばん簡単なこと。それは、食べ物を残さないことです。これは、各家庭ですぐできることだと思います。そして、無駄な買い物はしない。使えるものだけを買うということが、ごみの減量につながります。調理にあたっても、大根の葉、皮などを工夫して調理することによって、調理くずを減らすことができます。作りすぎたものは、むやみに捨てないで冷凍保存にすること

ができます。

最終処分場の延命という大事な問題があります。あと10年弱と言われていますが、努力によってどれだけ延命できるか、という課題です。

地球の温暖化によって、異常気象も発生しています、車のアイドリングの防止とか、電気機器の主電源を切るということで、少しでも温暖化の防止を図ることができます。

資源は無限ではない、限りある資源を大切にしなければなりません。次代を担う子どもたちのために、ごみの減量化を推進していかなければなりません。皆さんのお知恵も、ぜひお寄せいただきたいと願っています。

司会　梶山さんからは、長年の地道な活動を踏まえての具体的なご報告、ご提言をいただきました。つづいて、リコーの斎藤さんにお話しいただくわけですが、実はこうしたテーマで登場されることに、多くの企業の方はたいへん躊躇されます。そうしたなかで、リコーという会社は、環境経営に関する力強いリーダーとして、世界中から注目を浴びています。斎藤さんは、そのリコーの厚木事業所を中心に環境の分野で長年にわたって活躍してこられました。

4　リコーの全生産事業所でごみゼロを実現

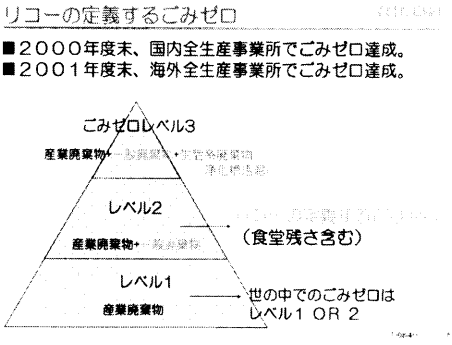
斎藤　厚木事業所の概要をまずご紹介します。小田急線の本厚木駅から北に向かって10kmほどのところに位置し、敷地は約8万6千㎡、現在の従業員は２千名弱です。37年前に出来た当時は、画期的な工場と言われました。工場の建物にはいっさい窓がない、無窓工場です。精密製品を造っていることから、ごみやほこりをシャットアウトしようということで、当時はそれで良かったのでしょうが、環境問題に取り組み始めたら、こんな最悪の工場はないなということになりました。窓がありませんから、せっかくの太陽の光を吸収できません。全面的に建て替えることもできないことから、屋根のリニューアルの折に吸収性のよい塗料にするなど、工夫しています。中央の40mほどのシンボルタワーは給水塔になっていますが、塗装には光触媒を使って雨が降れば自然と汚れを落としてくれる工夫をしています。ネオンも、最新のLED（発光ダイオード）を使って省エネを図っています。

この工場で何をやっているかということですが、一般的にオフィスで使われているコピー機、プリンターなどが主力です。敷地のいちばん端に、エコセンターがあります。工場から出る廃棄物の分別を行っています。

リコーは賞をとるのが好きな会社というのでしょうか、何でもやるんだったら一番でやろうよというところがあって、1975年には品質管理でデミング賞を受賞しました。1992年には品質マネジメントシステムのISO9002の認証を獲得しました。次はISO14001だということで動きだし、この頃から世の中で環境問題が大きく取り上げられるようになりました。これもどうせやるんだったらいの一番に取り組もうということで、1995年に御殿場事業所、そして97年に厚木事業所として認証を取得しました。

最近では、2000年に厚木事業所がリサイクル率100%を達成しました。何らかの形でリサイクルを行い、ごみゼロを実現しようという考えで取り組みました。

リコーでは、早くからトップが環境綱領を掲げ、それに基づいて取り組んできました。リコーの定義するごみゼロですが、３つのステップに分かれています。いちばん下からレベル１、２、３と呼んでいます。一般的に産業界でごみゼロというのは、産業廃棄物をゼロにして出さないことを言っていますが、それにレベル2では一般廃棄物、さらにレベル３というのは浄化槽汚泥を含む生活系廃棄物も入れて焼却ごみゼロを達成しようとしています。最低、レベル２以上を、リコーではごみゼロと呼んでいます。2000年度末には国内全生産事業所で、2001年度末には海外も含めて全生産拠点ではこうしたごみゼロを達成しています。



最近、３Ｒということがよく言われますが、リコーでは10年以上前に５Ｒということを言いました。Reduce（ごみ発生量を減らす）、Refuse（ごみになる

ものを買わない)、Return（購入先に戻せるものは戻す)、Reuse（再使用する)、Recycle（再資源化する)、これらを重点的にやっていこうということで進めてきました。

環境問題に取り組んでつくづく感じたのは、部品など数百社のメーカーから購入していますが、リコーとして欲しいのは部品だけなんですね。ところが、中には大きな緩衝材などが入っており、これらも一緒に買っていたんですね。部品を製品に組み込んでしまうと、そうした緩衝材などはごみになってしまいます。石油をドラム缶で買うと、空になるとドラム缶がごみなってしまいます。それじゃ最初からタンクローリーで入れてもらいましょうと、そういうふうに考えたわけです。

部品も、当初は段ボールが多かったのですが、リターナブルな通い箱で何度も使えるようにしました。仕切りや緩衝材も、使える限り戻して、何度も使うようにしました。こうして、事業所内に緩衝材が残らないようにしたのです。

事業所の食堂から出る残渣（ざんさ）も馬鹿になりません。当時２トンくらいあったものを、バイオバクテリアによって消滅させるといった取り組みをしました。浄化槽汚泥も、これもバイオを活用することによって発生量を減らしました。

食堂のサンプル品も、毎日の終わりにはごみになるわけですね。これもバーチャルメニューと呼ばれる、パソコン表示のメニューに切り替えることによって、ごみになるのを防ぎました。これだけでも、月に何トンもごみにしないで済みます。

プラスチック成型から出る不良品はランナーと呼ばれ、従来はごみと考えられてきましたが、これも溶かしてもう一度原料にするということで、ランナーリサイクルを実現しました。

とにかく、工場から出すなら資源として出そうということで、徹底した分別を行いました。廃棄物業者もたくさんありますので、安心して渡せるように現地確認を行いました。リコー基準を作って、それに合致した業者に絞り込むということもやってきました。

各部署が廃棄物をエコセンターに持ってきて、ここで分別を徹底して行います。苦労したのは計量システムです。もちろん当初から行っていましたが、多くの部署がそれぞれに目標を掲げて環境問題に取り組む必要があります。自分

たちの部署からどんなごみがどれだけ出ているか、きちんと正確に把握することが不可欠です。そうでなければ、次の改善に結びつきません。そこで計量システム導入し、各部署で常にリアルタイムで把握できる体制を作りました。これによって、自分たちの取り組みの成果や問題点がすぐわかるわけですね。こうして2000年からは、毎年ごみゼロを実現しています。

厚木事業所の環境ナビゲーターというのがあります。これを見れば、どのごみはどこへ持って行ったらいいのか、自分の部署の環境に関する成績がどうか、すぐわかるようになっています。

長年環境問題に取り組んできて思うことは、やはり経営トップの思いの大切さです。10数年前、世間がまだあまり環境、環境と騒がないころに、当時の社長が、これからは環境だということを訴えました。しかも、環境をやったから利益が出ないとか赤字になったというのはおかしい。環境をやることによって逆に利益が出る、そういう信念を持ってやっていこうということを言いました。そういった思い、信念が大事だったかなと思います。それが、それぞれの事業所の所長に響き、トップの方針の下に展開することができました。

それと、環境への取り組みは全員参加でないと意味がない。限られた人だけの活動ではいけないということですね。最初は、どうしてもわれわれ総務の担当者や推進者が中心になっていました。正直者が馬鹿を見るような活動であってはいけないなということで、守れない者が恥をかくような雰囲気になっていったかなと思います。それと率先垂範、諦めないこと、が大事だと思います。

わたしがやってきた中で目に見えて効果があったと思うのは、事業所内の売店で物を買ったときのビニール袋ですね。月間では何千枚と出ていましたが、これは最終的にはごみ箱に行ってしまうわけですね。もったいないから止めようということで、ある日突然売店で配らなくなりました。当初は社員も憤慨しました。冗談じゃない、おれは客だぞと。相当抵抗を受けましたが、頑として止めないで、手で持っていってくださいと呼びかけました。大量に買ってくれる人には、大きなリサイクルの袋を調達して無料であげて、それを使ってくださいというようにしました。これはいちばん効果があったかなと思います。社員のあいだに、自分たち一人ひとりがごみ減量に協力しているんだという意識が浸透できたと思います。いまでは、手で持っていくのが当たり前という感じ

になりました。

やはりごみ減量のできる環境を整えることが大事ですね。こうすると、皆さんも楽ですよねとか。活動の一端をご紹介させていただきました。

司会　ありがとうございます。リコーのような大きな企業で、ごみゼロをすでに達成しているということは、大きな驚きではないでしょうか。

次は、木谷さんにお願いします。木谷さんと言えば、耐震補強への取り組みでご存じの方も多いと思います。今月始めにも、木谷さんが副理事長兼事務局長を務めるNPO法人平塚・暮らしと耐震協議会が第1回日本耐震グランプリで内閣総理大臣賞を受賞されました。きょうは、東京都庁にお勤めの折の体験などを踏まえて、ごみの問題についてお話しいただきたいと思います。

5　リサイクルから全国的なネットワーク

木谷　ごみの問題にも環境の問題にも強い関心を抱いて関わりを持ってきました。先程来の皆さんのお話もよくわかります。

1988年というと、ちょうどアメリカ上院で地球温暖化の問題が警告された年ですが、当時たまたま私はアメリカに長くいまして、西海岸のシアトルで、ごみを規制する方法として経済的手法があるということを初めて体験しました。どういうことかというと、ごみ一袋出すといくらと、月極で決めるんですね。ごみをたくさん出してもいいんだけれど、たくさん出せばそれだけお金がかかるという仕組みです。シアトル市が、ちょうどそういう制度を採用した時だったんです。これに対して市民が真剣に取り組み、小学生の息子もどうしてごみを減らすかと真剣に考えているわけです。たぶん、成功するとお小遣いが増えたんじゃないかと思います。これはなるほどうまい方法だなと思ったことを覚えています。

ごみの減量について、これまでの皆さんがお話しになったこと、いずれも大事だと思いますが、ごみをたくさん出しても同じお金しかかからないというのは、非常によくないと思います。なぜならば、ごみ処理には行政が大変なコストを負担しているからです。また、環境にも負荷をかけている。従量制で、たくさん出せばたくさんお金がかかってしまうという仕組みを、市民の側が行政

や政治の側に要求することが必要だと思います。

わたしは長く東京都庁に勤めていましたが、1996年頃に新宿西清掃事務所長をやったことがあります。300人ほどのごみを収集・運搬する職員と一緒に仕事をしました。その時に、事業系のごみの有料化という課題がありました。これまでは、ただで出していた事業系のごみ、家庭ごみではありませんが、それを袋1杯いくらと、まさに従量制にしたんですね。袋を買ってもらって、商店の人たちがごみを出すときにその袋しか使えない形にしたんです。

すごい反対がありましたが、これをやった結果、どうやってごみを減らすかということに真剣に取り組み始めました。これが、かなり有名になった早稲田のリサイクルまちづくりです。自動販売機（写真右）のような機械にペットボトルを入れると、くるくるくると何かゲームが出てきて、コーヒー1杯とか出てくる、有名なものです。1996年の11月には、ごみゼロ平常時実験というのを早稲田大学の中で行いました。安井潤一郎さん（現衆議院議員）が会長を務める早稲田商店会が中心になって取り組んだ、非常にユニークなものです。『五体不満足』の著者として有名になった乙武洋匡君も、この頃さっそうと現れてこの活動に加わってくれました。彼に一緒にまちづくりをやろうと声をかけると、「はい、やらしていただきます」と言って、われわれの仲間になりました。その後2年くらいして、あの『五体不満足』という本を出しました。

そんな形で、早稲田商店会のリサイクルまちづくりに、わたしは行政の側から一緒に加わって取り組みました。それがかなり全国的な広がりを見せ、今で言うネットワークが広がっていきました。インターネットを活用出来たということもあります。産業振興ビジョンのネットワークとか、2002年にはNPO法人東京いのちのポータルサイトという、防災や耐震補強を進める団体ですが、その結成につながっていきました。90年代の後半から日本全体にＮＰＯのネット

ワークが広がり始めましたが、そうした中でもかなり大きなものだったと、今になって思います。

次に、外側の環境危機と内側のこころの危機という問題です。この2つは明らかにつながっていまして、無制限にお金で物を買って、たくさん消費して、ごみを出すということは、人間のこころを深く傷つけるもので、許されるものではないと思います。自分の生存する以上にたくさんの物を消費する、あるいは食べることというのは、自分の健康を害し、環境破壊をするというだけではなく、たくさんの命を奪うという意味を持っています。倫理的に、してはならないことだと思います。

母や祖母たちの世代までは、そうした考え方をしっかり持っていましたが、戦後そうした考え方はなくなってしまいました。消費は美徳だ、国民経済の半分は個人消費だから、これが増えないと困る、消費はいいことだ、というのはとんでも無いことです。過剰な消費、過剰な排出によってどうなってきているか、そのことの報いというものを、わたしたちはしっかり受けているように思います。

今月の23日から25日まで、広島県の鞆(とも)の浦というところで、「全国耐震まちづくりフォーラム鞆・日本のこころ」というイベントを開催して、帰ってきたばかりです。ここには美しい海や美しい江戸時代の町並みが残っています。夜景も素晴らしいですね。そこで目にしたご来迎にも胸を打たれ、ほんとうに外の世界とこころがつながっているなと思いました。

いま、環境が崩れ、こころが崩れ、とんでもないことがたくさん起きている。何なんだろうか、これは。わたしは２年前には東京都庁に勤めていましたが、早晩都庁を辞めることになる、いったいこの現状をどう評価するんだと、自分自身に訊いたんですね。答えは、著しく悪い、とんでもなく悪い、というものでした。

２番目に、おまえは、というのは自分のことですが、責任があるのかと訊ねると、答えは、あるということなんですね。わたしの場合、世代的にあるというのではなく、公務員として世のため人のためにうんと仕事をしなければならなかったのに、頑張ってきたつもりではあるけど、結果がこうなっているということは、明らかに自分に責任がある。

３番目に、じゃあお前はこれからどうするんだ。いずれ退職することになる、自分がいちばんやらなくちゃいかんこと、やりたいことをやろうということで、この３月に、定年より１年早く退職しました。いま耐震補強やこころの問題、福祉の問題を含めて、やらなければならないことをやっています。

いろいろ考えると気が滅入ることが多くて、どうやって解決できるんだろうかと悩みます。しかし、根っこにある、こういうことはほんとうにいいことだ、こういうことはやっぱりやっちゃいけないね、という思いを共有することが大事なんじゃないでしょうか。そして、一人ひとりのライフスタイルを変える、これは自分で出来ます。そのときに、みんなで思いを共有していく上では、文化の問題、こころの問題、こういうことをしたら楽しいねということを体感することによって、大量生産・大量消費ではない楽しさを、自分の生活の中でつかむことが大事なんじゃないだろうか、そんな気がしています。

6　ごみゼロ宣言で仲間づくり

司会　木谷さん、ありがとうございます。皆さんの熱のこもったお話で、討論の時間がほとんどなくなってしまいました、笠松町長、先程来の皆さんのお話をどのように受けとめられたでしょうか。

笠松　今までのお話を伺って、やはり企業のトップの方が進めたら、ほんとうに素晴らしいことが出来るんだな、という気がしました。リコーの取り組みは、企業の中でもトップレベルにあるということで知られていますが、そういう取り組みの中で、いま最後に木谷さんからお話のあった、やってはいけないことと、やらなければいけないこと、という点ですね。やってはならない消費も美徳というように考えることは、恐ろしいことだと思います。

基調講演でもお話ししたように、やってはならない焼却を、税金を２兆円も

使って大々的にやっている。これを進めると、膨大な資源が無駄になり、大気汚染や温暖化を推し進めます。焼却のための設備にも寿命があり、何年かで更新しなければならない。せいぜい20年かそこらで更新しなければならず、そのために膨大な費用がかかります。さらに、最終処分場がどうするんだという問題があります。まさに、悪循環なんです。この悪循環を断ち切らないといけません。

いまの日本は、住民と行政の、言わば民主主義か権力主義か、ということになっています。権力で土地を買収して、規定にあっていればごみを燃やしても良いということになっている。地域の住民からはものすごい反対があります。なぜかと言うと、健康被害が出るんじゃないかと、子や孫の代まで土地が汚染されるのではないか、見えないごみがいちばん恐ろしい。

こころの問題という指摘がありましたが、こころも見えないんですね。その点は、教育から直さないといけない。教育は、真善美の追求だと思います。仕事をやっていて思うことは、真実や善いこと、美しいことを追い求めていかないといけない。大企業でも、不祥事で一瞬にして駄目になる企業があります。食品メーカーでも、つぎつぎと問題が出ていますね。防衛省の次官にしても、善いこと、美しいことから外れて、身を破滅に導くと同時に、自分も含めて不幸な人がたくさん出来る。

ペットボトルにしても、われわれがポイ捨てをしないで何回も使うということは、明日からでも出来るんですね。そういうふうにして、資源を最大限に使う、美しい社会を築いていくということができるのではないかと思います。

司会　ありがとうございます。ところで、松岡夏子さんは、ほんとうにお若いにもかかわらず、デンマークに1年間留学したほか、海外の自治体の議会にも呼ばれて証言したりするなど、国際的に大きな活躍をしておられます。そうした経験から、お考えになっていることをお聞かせください。

松岡　ごみ関係の国際会議に出かけて日本から来たと言うと、「おお、焼却大国か、ごみをたくさん焼いている国だね」と、白い目で見られます。こちらはリサイクルの自慢話をしに行ったつもりなのに、うーんといった気持ちになって帰ってこなければなりません。資源を無駄使いしている国と見られているんだと痛感しています。

わたしがデンマークに行っていたのも、どんないい取り組みをしていたのかということもありますが、国内を見ても、たくさんごみ区分をして再資源化しているところがあります。そうした情報発信を積極的にしていきたいということで、取り組みを紹介しています。

先ほどのリコーのお話を伺っても、すでにごみゼロを達成しているということで、ひとつの統率された組織の中で徹底的にやれるのだなと、興味深く伺いました。

家庭ごみについては、いくら分けても、焼却と埋め立てがゼロにはならないんです。最近は、８割くらいで横ばいになっています。なぜかと言うと、リサイクルのできないものが並んでいて、それが皆さんの手に渡った時点でごみになってしまい、ごみゼロにはならないんです。いまは自治体がすべて責任を負っているので、そういうことになっているのでしょう。

それと同時に、わたしたちが日頃使う物が、リサイクルを進めようということで作られていないんですね。リサイクルをできるものについても、その種類があまりにも多くなっているんです。飲料容器にしても、のどが渇いたなと言ってコンビニで飲料を買います。すると、容器がカンだとかビンだとか、ほんとうにいろいろあるんですね。これらをリサイクルしようとすると、細かくいくつにも分けないといけない。それをしないと、燃やすごみになってしまいます。

循環型社会を形成していこうということになれば、物を生産するときから分別しやすいように、原料や規格を統一するとか、日本でも考えていかないといけません。ドイツでは、デポジット制度をとっていますから、種類が多くなくて規格も統一されています。日本でもそういう工夫がされていかないと、家庭から得るごみについての、究極のごみゼロを達成することはできないと考えています。こうしたことを達成するには、人口２千人の上勝町だけでは難しいんですね。だからこそ、ゼロ・ウェイスト宣言をしようということで、仲間づくりに取り組んでいます。町田市の方々も取り組みを始めています。きょう会場に来てくださった方々も、この出会いを機会に、ぜひそうしたことを考えていただければ嬉しいと思います。

7　小さな町の大きな勇気と知恵を学ぼう

司会　26歳という若い松岡夏子さんのような方が、これほどまでに真剣にごみゼロに向かって尽力くださっているということは、ほんとうに心強いことだと思います。梶山さんやお仲間にはもちろんこれからも頑張っていただきたいのですが、同時に湘南地域でも若い方々にも参画してほしいなと願わないではいられません。

時間の都合で、もう締めくくりをしなければなりませんが、笠松町長に初めてお目にかかったのは、ことしの２月、二宮町の市民グループの招きで講演に来られた時のことでした。その前日に夕食の席で親しくお話しするうちに、そのビジョンと実行力、お人柄に深い感銘を受けました。そのことをいろいろな方にお話ししているうちに、教員の仲間からもこうした講演会で市民の皆さん方と一緒にお話をお聞きしたいということで、きょうの講演会の開催となった次第です。

今回の準備にあたって、笠松町長とは毎日のように携帯電話やメールでご相談やらお願いをしてきましたが、笠松町長や松岡夏子さん、その他町役場の方々のご対応が実に迅速なんですね。ITのおかげもあるでしょうが、平塚市内の方よりはるかにスムーズにコミュニケーションができることに、これまた深い感銘を覚えました。伺うところによれば、ITに関してもマイクロソフト社と組んで、新しい情報化社会のモデルになろうと取り組んでおられるそうです。そうした積極的な姿勢から、話題の葉っぱビジネスに加えて、きょうのテーマであるごみゼロ問題にかかわっていらっしゃる。

ごみゼロと聞いた場合、多くの皆さんは、いくら何でもそんなことは無理だよとお考えになろうかと思います。しかし、わたしが企業に勤務していた当時、10年余にわたって仕えた松下幸之助という経営者は、こういうことを言っていました。企業にとって、特にメーカーにとってコストの引き下げというのは極めて重要だが、職場で５％のコスト削減をしようと言ってもなかなか実現が難しい、しかし50％引き下げようと呼びかけたら出来てしまう、と言うんですね。どこに違いがあると、不可能と思われる目標でもしっかり心に持つことによって、いまやっていることのすべてを否定して、一から新たな方法を考えるよう

になる。そこから、ふつうだったら考えられないような知恵や力が生まれてくる。笠松町長の取り組みについて、これと似たものを感じるのです。

今回の案内ちらしに、「小さな町の大きな勇気と知恵を学ぼう」と謳ったのも、準備の過程でそうしたことを強く思ったからです。わたしたち、比較的大きな町に住んでいる者も、われわれのところでは出来ないよというのではなく、上勝町のような取り組みに関心を寄せ、陰からも応援する、そこから学び、また新たないろいろな知恵を提供する。そういう形で上勝町にひとつのモデルを作っていただきたい、そういう気がするわけです。

きょう最初にも申し上げましたが、これまでのように経済力に任せて欲しいものを欲しいだけ買い求め、使い、余ったり使い終わったりしたものをごみとして行政の手で片付けてもらう。大きな焼却場を建設して燃やし、埋め立てる、そうしたやり方が、この先いつまでも続けられるわけがありません。とりわけ、人口が日本の10倍以上もある中国やインド、さらにはインドネシアなどが、今世紀中には日本に劣らない経済発展を遂げていくに違いない。その折、日本はこれまでと同じように贅沢をして勝手に振る舞うけれど、中国やインドなどは豊かになっても、節約をし、貧しいときのままの生活を続けなさい。そういうことが、われわれに言えるわけがありません。そうなれば、中国やインドなども、日本の生き方を学んでくれるような、そういうお手本を日本人の手で生み出さない限り、人類社会の存続はあり得ない。その一つのヒントが、上勝町の動きに提示されているように思えます。

先ほど梶山さんから、食べ物を残すのはもったいないというお話がありましたが、わたしもそうした考え方の時代を生きてきたものですから、もったいない、もったいないと言って食べ過ぎ、いささか肥満状態です。こうしたことによって、成人病などを引き起こし、莫大な医療費が必要になるというのは、個人にとっても、社会や国にとっても大きな無駄と言わなければなりません。これからは、最初から必要な量だけ作る、不要なものは料理をしない、そこまで行かないといけない。

平塚市の姉妹都市でもあるアメリカ、カンザス州のローレンス市に滞在していた折、あるお店で大きな看板を目にしました。「地球は未来の世代からの預かり物」という言葉です。アメリカ原住民の方々の諺だそうですが、そうした

視点から現在の地球の実態を見ると、どうもわれわれの世代は受け継いだ折の地球を大きく傷つけているのではないか、と思えてなりません。

最後にぜひご紹介したいことがあります。笠松町長や松岡夏子さんの名刺を受け取られた方は、裏側をご覧になってください。実は、不要になったカレンダーなどの裏面を使って印刷しておられます。さらに、上勝町役場から送られてくる大きな封筒の表の下の部分には、定型封筒の表になる部分が印刷されています。そこを切り取って封筒にして使えるという仕組みです。笠松町長は、「町民が一休さんのように、知恵を絞って町づくりを推進しよう」とおっしゃっていますが、まさにとんちの一休さんのように、細かなことにも実に工夫をしておられるということを感じます。

本来であれば、パネリストの皆さんに活発にご議論いただき、さらにはご来場の皆さんからもご質問をお受けすべきところですが、時間の都合でここで終了することをお許しください。なお、アンケート用紙にご記入いただいたご意見、ご質問については、後日笠松町長やパネリストの皆さんからご回答をいただき、お名前やご住所をご明示くださった方々には郵送でご返事申し上げることにします。ご了承ください。

笠松町長、松岡夏子さん、パネリストの皆さん、そして会場の皆さん、長時間にわたる熱心なご参加、まことにありがとうございました。

（この後、総合司会の浅海典子准教授の進行により、講演会に寄せられた協賛金計14万円が上勝町ゼロ・ウェイスト推進基金に対する寄付として、平塚商工会議所伊澤繁雄専務理事から笠松和市町長に贈呈されました。つづいて笠松町長には神奈川大学の中島三千男学長から、松岡夏子事務局長には国際経営研究所の榊原貞雄所長から、それぞれ花束が手渡された後、最後にまちの音楽家でもあるパネリストの木谷正道氏のギター伴奏で、全員が「ごみ仲間」（平塚市ごみ減量化婦人の会のごみ減量の詩）と唱歌「故郷」を合唱（写真）して閉会となりました。）

アンケートに寄せられた質問と回答

笠松和市町長(上勝町)への質問と回答

1．34分別を実施して以来、上勝町の廃棄物処理コストはどうなったか？

ゴミ処理コストは、34分別資源化を始めた平成13年（2001）度には焼却ゴミ１kg当たり283円でしたが、18年（2006）度は151円となっています。また資源ゴミは１kg当たり13年度には21円でしたが18年度は14円となっています。

2．平塚市ではごみの有料化をしようとしているが、上勝町では有料化しないでうまくいっているのか？

上勝町の指定袋は１枚15円（45リットル用）、10枚150円で町内の商店で販売していますが、現在までのところ問題はありません。

一般的にゴミの有料化はゴミ袋の代金にゴミ処理費の一部を上乗せして１枚100円とか200円で市町村独自の値段を付けて、指定のゴミ袋を販売し指定ゴミ袋以外は取り扱いをしないようにしています。そしてゴミの量が減少したと言っていますが、指定ゴミ袋の値段があまり高いと不法投棄を助長することになりかねないので注意が必要です。

3．平塚市内のマンション住まいでは、生ゴミを堆肥化するのは難しい。上勝町にはそうしたマンション住まいの住民はいないのか？　都会ではどうすればよいか？

上勝町では周辺に農地があり、農家の人が貰ってくれます。給食センターなどでは、自宅の花壇などの肥料として、従業員が無料で持ち帰っています。

一般家庭では６ヵ月に１回程度の入れ替えでいけます。都会のマンションなどでは、市や町の公園係や地域の農家の人とうまく提携して有効利用していただくことが必要です。結構よい有機肥料ですのでまとまれば魅力があると思います。

4．「ごみゼロ」は、26万都市の平塚でも実現可能と思うか？

私が提案している「資源回収法」ができれば、十分可能です。現在横浜市でも約30%を資源化しているということです。40万人都市の町田市も、ゴミゼロに向けて市民と行政が組織作りをしています。ゴミの減量化に向けて取り組むようになれば、政府も「がんばる市町村応援プログラム」で３年間支援してくれる制度があります。行政と相談の上頑張ってみられてはいかがでしょうか。

5．笠松町長が平塚市長になったとしたら、ごみ問題に関してまずどのように対応するか？

自治組織やゴミに関心が高い市民、各種団体、企業に呼びかけて、如何にすればゴミを効率よく資源化し焼却ゴミを減らせるか、徹底して現在のゴミの質や量などゴミの蘇生調査をしてプランを練ります。まずは生ゴミの削減をはかり、資源化をするための仕組みを関係団体やリサイクル業者と検討し計画的に実施していきます。生ゴミは原則自家処理を目指します。

6．使用済み製品の回収責任法案には非常に興味があるが、葉っぱビジネスで販売した葉っぱの有価回収についても考えているか？

食物や葉っぱなどの有機物で腐敗するものは、回収している途中で腐敗するおそれがあります。そのため、原則として消費者が自家処理するべくゴミナイス等のゴミ処理機を普及させ堆肥化を目指します。

問題は、葉っぱを入れるトレイや発砲スチロールの化学物質の容器をどうするかです。このような容器は、消費者がお店に持っていけばいくらかで引き取ってくれる仕組みを、全国ネットで作ることが必要です。それも一斉にやらないと、一部の商品だけがコストアップして非常に不利となります。全国一律に法律や政令で定め一斉に施行する必要があります。

7．ごみゼロ社会の実現には、人々の道徳の格段の向上が必要と思うが、どのようにお考えか？

私が考えている「資源回収法」はデポジット制です。消費者が不要になったものは取扱商店に持っていくと有価で引き取ってくれますので、不法投棄はなくなります。もし不法投棄がなされても拾って持っていった人が少しでもお金になりますので得しますから、ボランティアで拾っても報われ

ます。つまり不法投棄をしても捨てた人は損して拾った人が得する仕組みですから、必然的に小さいときから道徳心が身に付くと思っています。

8．そもそも上勝町で現在の基本構想を持つようになったのはなぜか？　その際に、住民参加の手法はとったか？

上勝町では、町の基本構想は元々町職員が縦割り行政で持ち寄りで作っていましたので、住民の意見や学識経験者の意見が反映されず、あまりよい構想とは言えませんでした。

現在の基本構想は岡山大学の農学部、教育学部、経済学部の３名の先生と町内を見聞して回り、その上で町内５地区で集会を持ちました。約200人の町民から意見をお聞きし、素案を作った上で再度住民の意見を５地区で集会を持ってお聞きする一方、商工会や農協、森林組合、役場職員、各種団体の意見をお聞きしています。

ゴミ処理について言えば、上勝町は従前から自家用の小型焼却炉や野焼きにより処理してきました。このような処理が禁止されることになったため、国は24時間365日焼却できる大規模焼却炉を広域行政で設置するよう都道府県を指導し、ブロックごとに協議会を設置しました。しかし、本町の周辺地域はすでに市町村単独で焼却炉を整備しており、本町は町単独で考え調査研究し適正処理をしなければならない、という事情がありました。

そこで、平成５（2003）年度にゴミ処理に関する基本構想を検討しましたが、地球規模で進行する地球温暖化を始め、酸性雨など地球規模での環境汚染や環境破壊をどうするか真剣に考え行動に移す必要が生まれました。そして平成５年度に環境庁の補助事業で「上勝町リサイクルタウン計画」を策定し、これに基づいて現在実施しています。

この計画の構想策定から計画づくりの段階で全世帯に対しアンケート調査を行い、回収率は60.7％でした。また小学生や中学生、各種団体など多くの意見をお聞きしています。物流調査や意識意向調査で住民の約60％の意見が反映されていると思っています。

【コーディネーターの付記】

上勝町の施策や活動については、上勝町のホームページで最新情報を知るこ

とができます。(http://www.kamikatsu.jp/)

上勝町の基本構想や基本計画については、下記の書籍に詳しく紹介されています。

目瀬守男・笠松和市・坂本忠次・木原孝博・上月康則『新・いっきゅうと彩の里・かみかつ』(地域活性化シリーズ) 明文書房、2002年、2,600円

9. 葉っぱビジネスの成功が、高齢者福祉や介護の場で活かされているか？行政が取り組んでいるインフォーマルなサービスの支援策があれば、事例を教えてほしい。

高齢者はどうしても足腰の動きが鈍くなり、耳も遠くなり目も見えにくくなってきます。そこで高齢者には何が必要なのか、昔から病は気からと言うように気力が、そして食べ物や運動が体を元気にし、医療費の削減にもつながります。つまり高齢者には、若者も同じですが生き甲斐とやりがいが必要で、毎日何か目標となる生き甲斐が必要です。

上勝町の場合、一人暮らしの老人なども彩り事業（葉っぱビジネス）に参加し、人家の周辺の草刈りや畑仕事があり、自分の体調に合わせて動き、汗を流して生涯仕事をし、それが生き甲斐になっています。特に彩りなどはお金になりTVや週刊誌などにも取り上げられることから、それが励みとなり、気力が高まって元気が出ていると思います。

特に行政から支援策はしていません。

10. 葉っぱビジネスについて、季節感を出すことは解るが自然を守ることに相反するのではないか。

ご存じとは思いますが、紅葉や柿、南天などの樹木は毎年成長し大きくなりますので、多少剪定してもいっこうに成長が衰えることはありません。

むしろ剪定することで強くなり、台風時などにも倒れにくくなりますので、ご安心ください。街路樹や公園の木々は極端に整枝剪定をしていますが、丈夫に育っていることを見るとおわかりと思いますが、あんなに多く剪定はしていませんよ。葉っぱをお金にするのですから……。ご心配でしたら一度見に来てください。樹木は生き生きしています。

11. 笠松町長のパワーの源は？

大所高所に立って真・善・美を追い求めています。“人生は本気で思いっ

きり前向きに、本気でやっていると何でもおもしろいですよ。”

松岡夏子さん(ゼロ・ウェイストアカデミー)への質問と回答

1．ごみゼロ推進に当たって、これまでどんな苦労、努力をしてきたか？

「ごみゼロ」「ゼロ・ウェイスト」という言葉を使うと、即座に「人がいる限りごみは出る」「そんなことはできるわけがない」という拒絶反応が少なくありません。「ゼロ」を目指すのは、そこから大きな推進力が生まれるからであり、「ゼロ・ウェイスト」を掲げる意義は、「ゼロ」になるかどうかの議論よりも、そこへ向かっていくプロセスそのものだということについて理解を得ることが難しいです。理解が得られない場合は、形にして見せる、実感させることが重要だと思います。くるくるショップや、イベント時のリユース食器使用などの実践を通して、少しでもごみが減らせることを感じてもらうよう努めています。

2．これから環境問題に取り組もうとする後輩へのメッセージを聞かせてほしい。

「環境問題」という分野は、それだけで独立しているのではなく、それぞれの地域や場所の生活、事業活動、社会構造に深く結びついた形で存在しているものだと思います。それゆえ地域によって問題の質、人の動き、解決方法などは様々です。だからこそ、座学だけでなく、「現場を見る」ことが大事だと思います。公害問題の現場に始まり、環境先進地と言われる自治体や先進的な企業など、いろいろな現場に触れてみてはどうでしょうか。頑張ってください！

3．ごみステーションの写真でも、ガラス瓶やプラスチックに紙ラベルを貼ったものが多い。分別処理ではどのようにしているか？

ガラス瓶のラベルの扱いは自治体によって異なると思いますが、上勝町では処理をするリサイクル工場で分離することができますので、住民の方がはがす必要はありません。プラスチックについては、ペットボトルのラベルは剥がすことがルールです。その他のプラスチック製容器包装類については、値段のシールなどのラベルは剥がす必要はありません。

4．住民のマナーの向上、ルールの徹底が重要だと思うが、どのような苦労、

工夫をしているか？

住民がごみを持ち込む「日比ヶ谷ゴミステーション」という集積所では、シルバー人材センターの職員が持ち込まれた資源ごみの圧縮・梱包作業などをしています。分別についてわからないことは、ごみを持ち込んだときに職員に聞くことができますので、その繰り返しによりマナーは向上していると思われます。また、月１回上勝町民向けに発行しているゼロ・ウェイストアカデミーの広報紙「ひだまり」で、ゴミステーションで困ったことや、よかったことを紹介し、ごみを扱っている現場の声を町民の方に知ることができるよう心がけています。

５．ごみ問題に対する自治体の取り組みで、注目しているところはどこか（外国も含めて）？　どのような点か？

外国では、上勝町と同じく2020年までのゼロ・ウェイスト宣言を行っているアメリカ、カリフォルニア州のバークレー市（注：サンフランシスコ湾東岸にある人口約10万人の都市。カリフォルニア大学のバークレー校があり、政治的・社会的に全米でも最も進歩的な都市として知られる）です。ここはリサイクルできないごみを有料化し、分別されたリサイクル可能物は無料で回収するという経済的手法によりリサイクルの推進を行っています。それと組み合わされた形で、大規模なセカンドハンドのお店が事業的成功をおさめ、リユースも推進されています。多くの市民が、服、食器、本、家具に始まり、家庭のドア、お風呂など不要になった物をごみとして捨てるとお金がかかるので、そのようなお店に持ち込みます。そこで、必要とする人に安価で引き渡されていくのです（上勝町の「くるくるショップ」はこれがヒントです）。日本にもリサイクルショップがありますが、そのような場所がもっとごみ減量と結びついて活用されるようになるといいと思います。

国内では、愛知県の日進市です。人口８万弱のこの市では、通常の収集車でのごみ回収とは別に、市民がごみを持ち込み、分別できる大きな集積所が役場の隣に一箇所あります。そこでは、上勝町の日比ヶ谷ゴミステーションと同じくらいの種類の分別がされており、リサイクルが推進されています。自宅にごみをためておきたくない、自分の都合のいいときにごみ

を出したい方などに利用されており、市で扱うごみのうち15%がここで回収されているそうです。上勝よりも規模の大きな自治体で拠点回収をしている事例として、参考になるところが多いと思います。

長澤俊一環境部長（平塚市）への質問と回答

1．上勝町長の講演を聴いて、平塚市でも脱焼却、脱埋め立てを目指そうという考えを持つようになったか？　今回の講演会を今後の市政にどう活かしていくか、方向性を尋ねたい。

ごみ処理については、迅速・安全・清潔な処理が求められている。人口26万人都市においては、脱焼却、脱埋め立ては難しいと思われるが参考といたしたい。

2．上勝町の「くるくるショップ」のような施設を、平塚市内に設ける考えはないか？

リサイクルプラザはリサイクル商品・エコ商品などの展示や環境に関する情報を発信する情報発信コーナー、環境に関する体験学習に利用できる体験室、家具類を再生する再生工房室、再生した家具類を展示する展示コーナーなどを有した施設であり、今後有意義な活用をしていきたい。

3．平塚市での生ごみ堆肥化の可能性について知りたい。

各家庭での堆肥化を補助している。生ごみ処理器（コンポスター）の斡旋を平成２年度から始め、平成12年度からは一般家庭を対象に「家庭用電動生ごみ処理機補助制度」を開始した。また、その補助については１世帯１台、登録店舗から購入したものについて、本体価格の２分の１以内、限度額３万円の補助をしている。

4．平塚市でも10年ほど前に生ごみ堆肥化を試みたが、何かの理由で中止になったと聞いている。どのような事情で中止になったのか？

10年ほど前にモニター制度として集合住宅で、バケツに生ごみを入れ、それにＥＭ菌を加え、バケツを市が回収するという堆肥化を実施したが、一定の結果を得たので終了した経過がある。

5．平塚市でも、鎌倉市のように剪定枝の堆肥化に取り組むべきだと思うが、市の方針を聞きたい。

剪定枝の堆肥化については、再生場の確保、生成品の循環の環づくりなどの課題があるが、今後1市1町のごみ処理広域化計画の中で、新たな分別収集を行うとともに、処理施設の整備を行い、効率的な資源化を図っていく予定である。

6．平塚市のごみ問題に関する、30年後、50年後の夢は？

以前、超臨界水に生ごみを投入するとすべて溶けるという実験をみたことがあるが、その後どうなったか定かでないが、実現すればすばらしい。

梶山富子さん（平塚市ごみ減量化婦人の会）への質問と回答

1．平塚市ごみ減量化婦人の会にも、松岡夏子さんのような若い方はいるか？若い方を参画させる工夫をしているか？

30代の委員さんも活動していますが、松岡夏子さんの場合は仕事として環境問題に取り組んでいると思います。私達「平塚市ごみ減量化婦人の会」は自治会推薦です。年齢選択はできません。活動していく上で年齢は関係ないのではないかと思います。（若い方に手をあげていただければ良いのですが。）

2．ごみ減量化に関し、注目している自治体、地域、活動グループはどこか？

特になし。

3．ごみ減量化に対する男性の理解や協力についてどのように考えるか？

ごみ問題は主婦だけの仕事ではありません。男性の協力は不可欠です。減量化婦人の会では活動目標の中で地域の美化推進委員との連帯をはかり協力を得て活動しています。

齋藤啓司さん（リコー）への質問と回答

1．リコーでは、不要になった物を納入業者に返すしくみができているとのことだが、リコー製品のユーザーとの関係で、不要になった製品をどのように扱っているか？

複写機の例で言いますと、不要になった製品は販売店がお客様から回収し、リサイクルの方法にも明確な優先順位を設けています。回収した製品は、分解、分別して資源・エネルギーとしてリサイクルするよりも、可能

な限り製品に近い形でリサイクルした方が環境負荷も少なく、より大きな経済価値を生み出す、という考え方で、市場から回収した複写機を再生（リコンディショニング）し、再度市場に提供しています。再生複写機のビジネスは、循環型社会の実現に貢献する活動であり、今後も積極的に展開していきます。

2．リコーの先進的な取り組みを他の企業にも拡げる努力をしているか？

リコーグループの「環境経営報告書」、および各事業所単位の「サイトレポート」を作成し、それらはリコーのホームページで広く紹介しています。(http://www.ricoh.co.jp/ecology/)

【コーディネーターの付記】

リコーグループでは、自社だけの環境保全活動では十分とは言えないという考え方から、1998年５月に「リコーグループグリーン調達ガイドライン」を発行し、仕入れ先にも環境保全に自主的に取り組むよう要請しています。

ガイドラインの詳細については、下記のホームページに日本語、英語、中国語で紹介されています。(http://www.ricoh.co.jp/ecology/guideline/01.html)

3．工場内の浄化槽汚泥を燃やさないとすると、どのように処理しているか？どんな微生物を利用しているのか？　見学をさせてもらうことは可能か？

バイオによる分解処理を採用しています。限られた範囲では見学も可能です。

4．リコーのごみゼロ運動について、もっと詳しく知りたい。取り組みの歴史など、何か資料や参考書があれば教えてほしい。

リコーとしては、あくまで環境保全活動という形で展開してきましたので、「ゴミゼロ運動」だけをまとめたものは残念ながらありません。リコーの環境保全活動全体をまとめたものが、上記にも記した、年度ごとに発行されるリコーグループ環境経営報告書になります。

厚木事業所の活動でよろしければ、実際に事業所にきていただき、今まで取り組んできたことを現場現物で紹介することは可能です。

【コーディネーターの付記】

リコーのごみ、環境問題への取り組みの歴史については、同社のホームページに詳しく紹介されています。

(http://www.ricoh.co.jp/ecology/results/index.html)

さらに強い関心をお持ちの方は、以下の書籍をお薦めします。

峰如之介『七万人が動きたくなったこのひと言ードキュメント・リコー徹底マネジメント』ワック、2003年、880円

リコー社会環境本部編・吉沢正監修『リコーにおける環境マネジメントの実際』日科技連出版社、2001年、3,300円

木谷正道さん（平塚・暮らしと耐震協議会）への質問と回答

1．東京都の新宿西清掃事務所長だった経験から、商店街におけるごみ減量化のコツは何か？

1．やさしさ

「環境とは身の回り、公共とはご近所づきあいのこと」（安井潤一郎さん談）。

2．楽しさ

みんなで一緒にワイワイやると、DNAが喜びます。

3．役割意識

自分が誰かの役に立っていると感じたとき、人間は心から嬉しくなります。商店街が「モノを売る場」だけでなく、「まちと人々を支える場」であることが感じられると、ごみ減量化も含めて、まちづくりが進みます。まち場（商店街）が、地域にとってとても大事な役割を持っていることに気がついたことが、僕にとって新宿西清掃事務所時代の一番の勉強でした。

2．上勝町の取り組みについて、どのように評価するか？

「ごみゼロ」は簡単ではないですが、それだけに、首長が思い切って「ごみゼロ」を打ち出すことには大きな意味があると思っています。市民に問題を投げかけ、市民の知恵と力に依拠する姿勢はすばらしいと思います。

ごみゼロを推進するうえでは、「従量制有料化」（ごみを出す量にしたがって収集料金が変わる）の導入が不可欠です。上勝町の有料の指定ゴミ袋制度もその一つであり、ゴミを減らせば家計の負担が少なくなるので理にか

なっていると思います。

3．東京に次々とタウンが開発され話題になってきたが、こうしたタウンこそ真っ先にごみゼロタウンにすべきだと思うが、どのように考えるか？

ニュータウン開発に際してはもとより、全てのまちで、ごみゼロをはじめ循環型のまちづくりを目指すことが必要だと思っています。地球温暖化をはじめ環境の崩壊は加速度的になっており、対応を急がなければなりません

4．家庭崩壊の状況が家庭教育をできなくしているとの意見を聞き、将来の環境教育に結びつけたい。各地のごみ屋敷についてコメントを聞きたい。

戦後60年余に、家族と地域社会の解体が進みました。このことが、教育、福祉、環境、防災・防犯、まちづくりなどあらゆる問題の解決を難しくしていると考えています。したがって、家庭、そして家庭を包み込む「地域の力」を育てることが急務です。

「ごみ屋敷」の問題もまた、まず地域の力で解決を図り、それでも解決ができない場合には、行政の力で必要な措置をとるべきだと思います。

コーディネーター(松岡紀雄)の後書き

今回のパネル討論では、それぞれの方々の活動紹介が中心となり、討論や意見交換を行うに至りませんでした。せっかく会場にお越しくださった皆さん方から、その場で直に質問や意見を伺うこともできませんでした。そのため、プログラムに添えたアンケートに、講師やパネリストへの質問の記入をお願いしましたが、FAXを含めて101名の方から回答が寄せられました。そこに記された質問を33項目に分け、講師とパネリストの方々に回答をお願いした次第です。

笠松町長が基調講演で強調されたのは、単にごみをどう処理するかということではありません。大きな人口をかかえた中国やインド、インドネシアその他の国々が急速な経済発展をしていくことを考えれば、資源問題、環境問題のいずれからから見ても、これまでのように好きなだけ資源を消費し、いらなくなったからと言って安易に焼却したり埋め立てたりということを続けられるわけがない。まず、限りある資源の有効利用に努め、不要になったごみについても最大限の再資源化を図っていかなければならない。ごみの焼却は、CO_2の排出に

よる地球温暖化の要因にもなることから、極力抑制しなければならない、ということだったと思います。

上勝町が行った「ごみゼロ」の宣言については、「ゼロになんてできるわけがない」と冷ややかに見つめる人々が少なくないようです。

しかし、今回の講演会の準備を進める中で私自身が痛切に感じたことは、こうした目標を掲げて真剣に取り組む上勝町には、内外のさまざまな分野の方々からごみ削減のための知恵とエネルギーが集まってきているということです。人口わずか2,000人の小さな町が、いまやごみ削減に関する日本最大の情報センター、シンクタンクになってきているのです。笠松町長や松岡夏子事務局長には、内外の自治体から助言を求める動きが相次いでいます。

「ごみゼロ宣言」の最大の効用は、そうした挑戦的な宣言と取り組みのおかげで、ごみ削減のネックがどこにあるかが、いち早く明確になってきたことでしょう。問題が絞られれば、その解決のための対策を考えることも可能になります。

今回のアンケートでは、「リコーのような大企業が早くからごみゼロに取り組み、成果を上げていることを初めて知った」という回答が数多く寄せられました。消費者や市民の立場から、こうした企業の努力に目を向け、声援を送ることが、他の企業への広がりにもつながっていくと言えるでしょう。

講演会場の玄関ロビーに、横浜市のゴミ削減への取り組み、G30を紹介したパネルがあったのに気づかれたでしょうか。

笠松町長との再三にわたる事前の打ち合わせの中で、人口363万人という大都市、横浜市のごみ削減の取り組みにも注目しなければならないと感じました。そこで、松岡ゼミ生に対して横浜市のごみ削減の取り組みについて勉強し、パネル展示をするよう指示したのです。

学生たちは、横浜市のホームページなどを参考にして事前調査をした上で、横浜市の担当者に訪問したい旨申し入れました。資源循環局資源政策課の方から1時間余の説明を受けて帰ってきた学生たちは、そろって感激この上ないという表情でした。その理由を尋ねると、30歳のKさんという男性の担当者が、事前に提出した18項目に及ぶ質問に、実にわかりやすく明確な答えをしてくださったというのです。

何より学生たちを感動させたのは、Kさんが最後に語った将来への夢です。「ごみと言えば、汚い、臭い、だから衛生的に処理しなければならないものと考えられてきました。しかし、ごみは、分ければ貴重な資源になります。残った生ごみなどからも、発酵によりメタンガスを回収できる技術開発が進んでいます。生ごみも、立派なエネルギー資源になるのです。映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の中で描かれた、ドク博士が開発した車、デロリアンの燃料は生ごみだったのです。生ごみを発酵させて、そこから生まれたメタンガスをエネルギーにして車が走る。これが、僕の夢ですね。」

この報告を受けた翌週、テレビのニュースでもこうした技術の前進が報じられました。

わたしたちが直面する悩みや問題には、２種類あるのではないでしょうか。そのままにしておいても時が経てば自然に解決していく問題と、努力しなければ事態はますます悪化してどうにもならなくなる問題です。ごみ問題、資源問題、環境問題は、明らかに前者ではないでしょう。われわれの懸命の努力がなければ、どうにもならなくなるということを自覚しなければなりません。

併せてこの問題は、政府や自治体任せで解決する問題でないことも明らかです。一人ひとりの努力は、実に些細な、目に見えないものです。しかし、一人ひとりの努力が積み重なって、初めて解決に向かう問題でもあるのです。